

2019年10月27日(日)

老球の細道507号

ラグビーW杯から学ぶ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ラグビーW杯日本代表は確かにがんばったが、世界の壁はやはり厚かった。前後にバスケットボールW杯、バレーボールW杯も開催されたが、同じように世界の壁は厚かった。

そんな折、バスケットボール3×3女子W杯はトステイン・ロイブル率いる日本代表が見事優勝して世界NO1になった。2020年東京五輪の正式種目にもなっているので、金メダル候補に一躍ノミネートされた。残念ながら、このことは多くの人は知らない。バスケットボール関係者でも知らない人がいる。言いたいことはたくさんあるが……。

当初ラグビー日本代表のメンバーに多くの外国人が存在していたことに違和感を持った人は多かっただろう。私もその一人だったが、大会が進むにつれてラグビー独特の代表ルールを知り、違和感もなくなってきた。そして、この多国籍軍団チームが示す強固なチームワークと結束の固さが、日本の将来の多文化社会、多様性社会を推進させるモデルになることを示唆するような論調もマスコミで取り上げられるようになった。

ラグビーの代表ルールは五輪と異なり、「国籍」主義ではなく「協会」主義である。だから帰化選手の問題はない。ラグビーで言う「日本代表」は実質「日本ラグビー協会」の代表である。①出生地が当該国②両親及び祖父母のうち1人が当該国出身③当該国で3年以上継続して居住。この3条件の一つでもクリアすればその国の代表選手になれる。ただし、過去にある国で代表になれば、以後別の国で代表になることは不可能になる。日本チームのほとんどの外国選手は③の条件で代表に入っている。

言葉も文化も違う多国籍軍の日本チームは、一つにまとまることを重要視して「ワンチーム」をスローガンにチームワークを強化したという。言葉を覚えることはもちろん、国歌や日本の歴史などを積極的に理解して日本の環境に順応することを重視した。それによってチームメートのみならず、多くの日本人からの支援も勝ち得たのである。

歴史を振り返ると、国の滅亡というのは敵国に滅ぼされる前に自滅する。自国内の内紛、まとまりの欠如が敗戦につながっている。スポーツの勝敗も、チームが1枚岩でなくまとまりに欠ける場合は、どんなに優秀な選手を揃えてもランク下のチームにあっけなく負けてしまうことがある。そこがチームスポーツの怖さであり、面白さでもある。

バスケットボールでも、相手チームと戦うのではなく、味方同士で喧嘩したり、審判にクレームをつけたりで、本来味方同士になって相手チームに立ち向かうべきエネルギーが余計なところにつき込まれては勝てるゲームも負けてしまうのである。

最後に、ラグビーはバスケットボールの産みの親でもある。あの激しいタックルなどのコンタクトを排除することでバスケットボールが創られた。しかし、最近バスケットボールではコンタクトの強さがあらゆる場面で要求される。ラグビーのゲームの中に色々なヒントが隠されているような気がする。かつて、ラグビー経験者がバスケットボールでコンタクトを怖がらずにプレイするのを何度も見てきた。私は小学時代に休み時間相撲やプロレスでなどの遊びをしたことがコンタクトプレイ大好きになった。

学ぶことは色々なところに転がっている。それに気がつくかどうかは毎日問題意識を持って生きているかどうかにかかるといえる。あつという間に今日が終わり、明日が待ち遠しい。